



小説のたくらみ
知の楽しみ

大江健三郎

新潮社

小説 しょうせつ のたくらみ、知 ち の楽 たの しみ	昭和六十年四月十日 印刷 昭和六十年四月十五日 発行	著 者 大 江 健 三 郎	発行者 佐 藤 亮 一	発行所 株式会社 新潮 社	郵便番号 一六二 東京都新宿区矢来町七一 電話 業務三(三六五)一一一 編集三(三六五)四一一 振替東京四一八〇八	印刷所 株式会社 光 邦	製本所 大口製本株式会社	定価 一一〇〇円
--	-------------------------------	---------------	-------------	---------------	---	--------------	--------------	----------

© Kenzaburō Ōe 1985 Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小杜通信係宛御送付
 下さい。送料小杜負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-303611-7 C0095

小説のたくらみ
知の楽しみ

大江健三郎



新潮社

小説のたくらみ
知の楽しみ
人江健三郎

新潮社

小説のたくらみ、
知の楽しみ

I

小説のたくらみ、知の楽しみ

Ⅰ 「異化」の話から、ヴォネガットの恐ろしい幻想へ

僕はさきに「小説を書かぬ人のための小説作法」という一連の講演をしました。小説を書かぬ人のための、とわざわざ断り書きしたのは理由があります。おおいに実際的な必要から、急いで小説を書きたい、そこで小説書きの実用的手引きとしての話を聞きたい、という聴衆が対象では、息がつまる思いがします。なんとか作家という職業の船に乗りえている者が、波間をただよう難破者に、救命ボートへの乗り方を講義するようなものですから。もつとも、もう死ぬまで作家であるはずの自分と、作家になるほかないという思いこみさえ棄てれば、多様な未来の選びとり方のある若い人たちの、どちらが本当の難破者かはわからぬ、と思いますが……

右にのべたことを消極的な理由づけとすると、小説を書く人よりもっと広くへ語りかけたいという、積極的な理由もあったのです。小説は人間について根本的に、かつ総合的、具体的に、つねに一からはじめるような新しい心で、把握しようとする営為です。したがって小説についての考え方には、「人間の科学」として一般的に有効な、面白いものがあります。それについて語りたいと、僕はねがったのでした。そして聴いてもらう対象としては、小説を書くこうしている人に限定せず、むしろ小説を現に書いている人にも、あらためて一般的な位置にたちも

どつてもらいたいと思いました。

さてその日の講演を終えると、聴衆に加わってくれていた友人、知人や、この企画に関係のある編集者、また質問をかかえてたずねてきた学生たちと、しばらく話すことになります。一応の仕事は終えた、という解放感があり、かならずしもその日の主題にとらわれず、最近読んだ本とか、現に進めている小説の先ゆきについて自由に話す。それも小説の領域のというより、もつと広く知の領域にひろがつてゆく会話となることが、むしろ自然な進みゆきでした。しかも僕自身、小説について、思考をより深め、より正確にすることができるようであつたのです。これから僕がやろうとするのは、そのような会話をつうじて前へ進めえた考えを書いてゆくことです。かならずしもあれらの講演のあとのひと時の、会話の復元というのではなく、新しく読み進める様々な書物や、かつは新たにはじめている小説の仕事ともつないで、自分にとつても生きいきした知の楽しみであるような作業として、小説のかずかずのたくらみを語りたいと思います。

「小説を書かぬ人のための小説作法」は、さきに僕が書いた『小説の方法』(岩波現代選書版)をテキストに、いわば「方法から作法へ」という仕方です。この小説の方法論を出してすぐ、頭の良さにも教養にもみずからたのむところある女流作家から、わけのわからぬ文章の見本として、例にひかれた部分があります。世の中には、受容と批判の関係について、次の三つの場合があるようです。1、わかつたものを(わからぬものはわかるまで努めて、その上で)、批判する。2、わかるものもわからぬといはって、批判する。3、わからぬものをわからぬままに、批判する。僕はおおむね1のやり方を通していますが、当の女流作家は、2ないし3の方法を、もしかしたら2のつもりで3の方法をとつたのです。

論点は、僕がその本のはじめに説明した、ロシア・フォルマリズムの「異化」という手法に
関わっていました。「異化」は、ありふれたものとして眼にとまらなくなっている事物を、あ
らためていちいち意識にきざみつけられるようにする、表現の手づきです。シクロフスキー
ら、ロシア・フォルマリストたちは、この「異化」を、文学のもっとも根本的な手法として提
出したのでした。しかも「異化」の方法を実際の作品にそくして検討すると、面白いことがは
つきりします。たとえば「甲虫」なら「甲虫」という言葉を、読み手の心にきざみつけるよう
にする、それが言葉のレヴェルでの「異化」ですが、つづいて、ある朝、甲虫になつていた人
間としてのグレゴリー・ザムザのイメージが心にきざみつけられ、かつは当のカフカの短篇が、
小説について慣れしたしんできた見方をひっくりかえすのに気がつく。つまり新しい小説のモ
デルとして心にきざまれる。そのように次つぎに大きいレヴェルへと、「異化」が展開してゆ
くのです。「異化」という方法論は、言葉のレヴェルから、小説というジャンルのレヴェルに
まで、一貫して有効な考え方だといえます。

僕は右の考えを整理し、展開して、『小説の方法』で次のように書き、その書き方自体を、
女流作家に小馬鹿にされたのでしたが、むしろ僕は筋のおったものいいをしているのではな
いでしょうか？《……小説の方法についての考え方として有効なもの多くは、この「異化」
の手法に典型されるように、言葉、語から文学、芸術の総体にむけて、その拡がりをこまかな
階層にきざむ、そのいちいちのレヴェルで力を発揮する。それは言葉の有機的な構造体として
の小説の、方法論の特質をあきらかにするものであり、小説自体の構造的な特質を示すもので
もあろう。》

この引用の頭のところに、《実際にこれより他の例を、僕はこれからそれぞれに検討してゆ

くが、とも僕は書いていたのですが、いま「異化」の話を持ち出したのは、具体的にその見事な例を、アメリカの現代作家の近作に見るからです。カート・ヴォネガットの『狙撃手名（Beacore）』（Penguin版）。ヴォネガットは現代世界の、無垢な魂が暴力的に踏みじられる悲惨、「叫びたいような悲痛」を、かれ独自の「叫びたいようなおかしさ」とないあわせて表現してきた作家です。事故で中性子爆弾が爆発し——あるいは都市ぐるみ難民収容所とするために住民を一掃する意図だったか、と主人公は疑いを持つにいたりもするのですが——建物や機械はみな無傷で残ったが、人間は全滅した、ミッドランド・シティーという町を描いています。

そのような悲惨の物語を、ヴォネガットは奇妙な滑稽さにひっくりかえして語り進めます。ヴォネガットの手法は、残酷で悲惨でおかしいエピソードを、それ自体暗喩（メタファー）のように使いつつ、つないでゆく仕方ですが、かつ作品ごとにやり方を微妙に変化させてもきましたが、この小説を読みながら僕は、中性子爆弾の悪夢に背筋がためたくなる思いをしながら——この小説を読んでいる間に、新しい首相がアメリカに行き、もちろんはつきり計算した「失言」として、日本を「不沈空母」にすると公言し、ソヴィエトはSS20ミサイルの極東配備強化を、それも日本が標的だと明言しつつ示唆しました——僕はしばしば声を出して笑いましたものです。たとえば主人公が、その書き手はすぐにも殺されてしまうことになる、潰滅直前のミッドランド・シティー空港のトイレで見つけた落書として、次の短詩がうつされています。これは落書として愉快で上等なものじゃないでしょうか？

“To be is to do” — Socrates.

“To do is to be” — Jean-Paul Sartre.

“Do be do be do” — Frank Sinatra.

さて僕はヴォネガットが、この小説を書くにあたってははじめから仕組んでいる、ひとつのたくらみについて話をしたいのです。たくらみは、小説の本文とむすばれている前書きのうちに――それはヴォネガットがほとんどつねにとる手法ですが――仕掛けとして仕組まれています。仕掛けは、小説の進行につれて、めざましい効果をあげるにいたります。

少年時の、ある「母の日」に、家の屋上の円屋根の塔のなかでライフル銃を掃除していた主人公が、妊娠中の婦人をあやまって射殺する、つまり二重殺人をおかす。警察での、私刑めいた酷たらしいあつかいもあり、かれは成人しても去勢されたような男となるのですが、みじめな生涯なりに、ある浄化作用を、周りの、やはりみじめな人たちにあたえる。あわれな人間への恩寵のように、中性子爆弾で潰滅する町から直前に外へ出て、かれは助かりもする。

ヴォネガットが前書きに仕組んだ仕掛けは、次のようでした。《私はまた、中性子爆弾は一種の魔法の杖だ、ともいう。それは人びとを一挙に殺戮するが、かれらの財産はそこなわれぬままに残す。これは第三次世界大戦に向けて熱心な連中から借りてきた幻想である。人の住む地域において爆発した、実際の中性子爆弾は、私が描写したのとは比較にならぬ大きさの苦しみと破壊をもたらすはずのものだ。》

さてこの幻想の仕掛けを通過させると、一瞬のうちに人びとは死滅したが、建物や機械はもとのままで、居間のテレビは画像をうつしつづけている、グロテスクなイメージが可能になります。死滅した町を鉄条網で囲みこみ、軍隊がまもっている状態について、近辺の農民が、あれは難民を連れてきて労働させるためだ、南北戦争以前の奴隷制の復活だと、告発の努力をする、という発想も、またそれにむすぶ、さきにのべた主人公の疑いも、可能になります。

加えて日本人の読み手である僕には、その暗黙の意味づけを読みとらずにはいられない、特

別な部分に照明があてられます。爆発時、町の外に出ていて助かった、ミドランド・シティーの住民が、もとの住いや財産への権利を放棄するかわりに国から保障を受けとる。それに先だち町を再訪するのですが——ここでも中性子爆弾の残留放射能は過小評価されています——、墓地にもうでた主人公が、思いがけない方角に自分の家を見出します。ライフル銃を発射した円屋根の塔は、それで罪をあがなえるかのように父親が引き倒した。もともと大きな円錐型の屋根だったのが、塔を倒した部分だけ薄い灰色のタール布で覆ってある。町に来た日本人が月の光のなかにそれを見て、富士山のようにだという、伏線もはってあったのですが、廃墟の町に戻った主人公が、あらためて自分の家を遠望するのです。

「私は地平線に向けて眼をあげた。そしてそこに、輝やいているシュガー・クリークの向う側に、私が育った家の、白い帽子をかぶったスレート屋根が見えた。沈んでゆく陽の水平な光線のなかで、それは本当に、日本の聖なる火山、フジヤマの絵葉書の写真そのままであつた。」

住民は殺しつくされたが、建物や機械はまるごと残っている廃墟、そのシンボルのように富士山を出してくる。われわれはこのシンボルを介して、ヴォネガットの構想のなかに、この廃墟を日本列島にむすぶ、表層からはかくされているイメージを見ないでしょうか？ ヴォネガットの世界で重要な言葉のひとつは、*decency* つまり人間らしい寛容さ、品の良さでした。この言葉をつうじて、かれとオーウェルとをむすぶこともできますが、そのような *decency* の人間ヴォネガットが、中性子爆弾で人間はみな滅びた日本列島というものを、あからさまに描くことはない。あまつさえ、そこでお機械だけは動いているエレクトロニクスの工場へ、ソヴィエトあるいはアメリカから労働者がおくりこまれて、自動車やヴィデオ・デッキの生産を再開する、そういう未来図を描いてみはしない。しかしヴォネガットの暗黙の構想には当のイ

メージがあつたことを、この富士山のシンボルが鋭く表現していると思うのです。

ヴォネガットは、核時代の作家を「炭鉱のカナリア」にたとえて、かよわい自分らの肉体をつうじて危険を早くから警告する、そうした作家の役割を定義しました。僕はヴォネガットがよくみずからの役割をはたしつづけていると考えるものです。

さて小説の作法のレヴェルに戻れば、ヴォネガットの小説から二つの問題点を引き出すことができるでしょう。ひとつは作家が事実にとらわれるのでなく、小説的なたくらみ、仕掛けをみちびくことで、より深く現実をとらえることができる——そのようにして現実を「異化」しえるということです。近年、ノン・フィクションの隆盛があつて、事実にくすぐることこそ表現にのびきならぬ力をあたえる、その道だという見方がゆきわたっています。それに対して、まったく基本的な考えですが、小説のフィクションのたくらみこそが、現実の現実らしきそれ自体を表現する力なのだというのに、あらためて注意をうながしたいのです。

もうひとつは、ヴォネガットがエンターテインメントの作者として出発したことから、いかなるアレルギー症状も示さずに、時にはあざといほどの仕掛けを小説にほどこし、新しい世界を生み出している、ということですね。村上龍が登場したさいに、これはサブ・カルチャだという批判がありました。つづいて当の批評家が田中康夫を評価したのを見れば、かれにとつてサブ・カルチャアという言葉は思いつきの域を出なかつたのでしよう。

しかしサブ・カルチャ独自の力ということは、積極的に考えられてしかるべきであつて、SFという読物の書き手として出発したヴォネガットが——当初からかれは、このジャンルの特性を、知的に高度なユーモアに照し出したのでしたが——いまやアメリカの現代文学をリードする作家たりえているのには、思いつきの批判をよせつけぬ、原理的な根拠があります。わ